

写真1 / 八千代座の正面入口（内部は見学もできる）



写真2 / 天井にびっしり描かれた広告看板。豊前街道の温泉場にして宿場町・山鹿の賑わいが髣髴とする



電業特報・プチ特集 / 20.02-2

熊本県の山間の温泉場・山鹿に今も遺る明治の芝居小屋 国指定重文・八千代座のめくるめく夢の空間を感激写!!

～明治・大正・昭和初期の賑わい空間を再現～

☆平成の大修理で見事よみがえった夢空間

今回のプチ特集は、熊本県山鹿市にある国指定重要文化財「八千代座」を訪ねた記録をお届けしたい。

八千代座は1910（明治43）年に建設された芝居小屋で、竣工以来、歌舞伎から舞踊、旅芝居の一座の興行、浪曲や落語など、さまざまな興行を行った。

その後、後に述べるように一旦、廃墟と化してしまいが、平成時代が始まる前年の1988（昭和63年）に重要文化財の指定を国から受けたこともあり、それ以前から一部で始まっていた、芝居小屋としての完全復活に向けた市民の熱い存続運動がさらに盛り上がり、ついに「平成の大修理」といわれる修復工事を実施。

21世紀の始まりの年、すなわち2001（平成13）年に「現代の芝居小屋」として復活し、さまざまな興行が再び



写真3 / 2階席最前列からみた八千代座の場内

行われるようになった。

つまり、八千代座は国の重要文化財にして、今も生きる現役の芝居小屋なのだ。写真でお分かりのように八千代座は、実に広くてカラフル。現代人の目からみても、めくるめくような興行空間を構築している。

修復工事にあたっては、天井や壁に描かれていた市内の商店等の広告看板（大正から昭和初期に製作されたもの）も見事に復活。その広告看板の多彩さ、鮮やかな色彩をみただけでも、八千代座が全盛期だった大正から昭和初期の「山鹿という街のにぎわい」が想像できるのだ。

修復された八千代座の「貴重さ」は、昭和初期の電気系統がそのまま残されているところにもある。写真6、写真7、写真10、写真11がそれだ。

暗闇に灯る白熱灯の裸電球の輝き、楽屋の壁に残された昭和初期の電気工事（配線）の模様。これらの簡便な配線工事で、写真10にあるような巨大なシャンデリアも灯っていた。

平成の大修理が行われる前は、天井の広告看板は色あせ、破け、カビなどで黒ずんでいたし、この巨大なシャンデリアも失われていたという。しかし、当時の八千代座を部分的に撮影した写真がいくつか残されていたことや、簡単な設計図がかろうじて残されていたことなどにより、このように見事な復活を遂げることができたのだ。

*本文、後略